

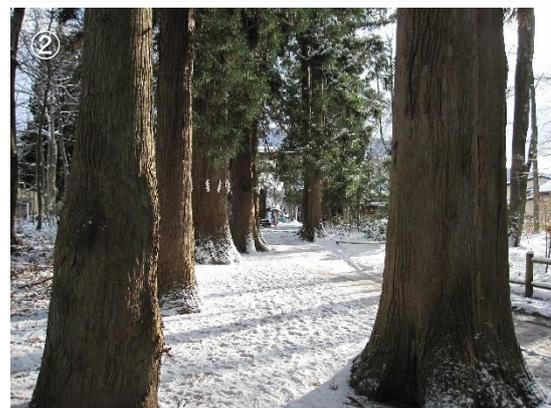
解明された「十和田山新道」の全貌

2022. 5. 21 弘前大学名誉教授 斉藤利男



1、霊山十和田と5つの参詣道

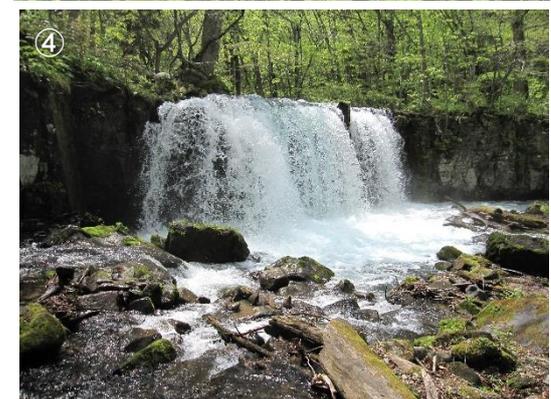
かつて十和田湖は、「十和田山」あるいは「御山」（カミの山の意味）と呼ばれ、岩手山、早池峰山、桂泉観音天台寺と並んで、盛岡藩主の祈願と代参が行われる霊山、いわば南部藩四大霊場の一つに数えられる、著名な山岳霊場でありました（『盛岡藩雑書』延宝4年（1676）9月2日条など。この他の領内の祈願所には、糠部総鎮守櫛引八幡宮と三戸八幡宮があります）。



また十和田湖は、文化4年（1807）8月、十和田登拝を果たした菅江真澄が、紀行文『十曲湖』に「道の奥の国五戸の郡十曲の湖に三熊の神をうつし、また難蔵法師のみたまを青龍大権現と齋ふ、この山にまうづるに、鹿角の縣毛布の郡の人ハ白澤越へせり、……五戸の郡より根の口とて奥瀬の源にいたる路あり、すちすぢいと多し」と記しているように、平安時代末期の平泉時代、東北北部に勢力を広げた熊野修験によって開かれた神仏習合の霊山、十和田青龍大権現と聖観音の聖地であり、多くの人々が参詣して祈りをささげ、都にも知られた庶民参詣の霊場でした（『三国伝記』「釈難蔵、不生不滅を得たる事」）。そして十和田湖は女人にも開かれた山で、5月15日の例祭には男女群れをなして登山し、その数は数百人に達したと、明治初めの『新撰陸奥国誌』は伝えています。

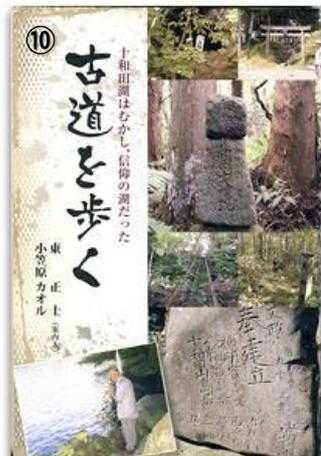


この「霊山十和田」の範囲は大変広く、八甲田山や奥入瀬溪谷を含む広大なものでした。そのことは、信仰の中心である十和田神社、かつての「十和田御堂」の正式の名が、中世には「額田嶽熊野山十彎寺」（「十瀧寺」「十涯寺」とも）、江戸時代後期には「赤倉峯十和田山正一位青龍大権現」と呼ばれていたことから、明らかです（『来歴集』『新撰陸奥国誌』などによる）。額田嶽とは糠田嶽、つまり八甲田山であり、赤倉峯も本来、南八甲田の主峰乗鞍岳と東の赤倉岳をあわせて呼んだ山名だからです。また、十彎寺とはいうまでもなく十和田寺で、湖の岸を意味するアイヌ語地名「トー・ワ」（知里真志保『地名アイヌ語小辞典』）に由来するとみられます。そして、別名を「十瀧寺」とも称したことは、「トー（湖）」と「瀧」、すなわち十和田湖の湖水と、奥入瀬溪谷の瀑布群（これらの滝は修験者たちの行場であったとみられます）こそが、霊場の核心部だったことを物語っています。



写真は上から、①冬の十和田湖中湖、②十和田神社入口の参道杉並木、③五戸道の膳棚から見た八甲田山、④銚子大滝（「御滝」と呼ばれた）、

また中世には、津軽の現平川市唐竹から小国・切明・元山峠をへて十和田湖に至る道もあり、切明は宿として栄えていたと伝えられています。明治14年(1881)には、五戸町の三浦泉八が私費を投じ、戸来村羽井内から犬吠峠を越えて宇樽部に至る新道を開きました(工事完成は2年後)。1902年2月、陸軍弘前31連隊の八甲田山雪中行軍隊(福島隊)が通ったのは、この道です。現在の奥入瀬溪流沿いの道は、1903年、当時の法奥沢村の事業として林道を開いたことに始まり、1912年、青森県知事武田千代三郎が自動車道化の工事費を予算化して、翌年工事に着手、1922年、子ノ口まで完工したものです。



2、十和田古道の発見と古道調査

では、これらの参詣道はどのような道だったのか。どこを通り、どんな施設があり、現在はどうなっているのか。実はそうしたことについては、近年まで不明でした。十和田古道の調査・研究が行われてこなかったからです。

そうした中、BUNKA新聞社の小笠原カオル氏は、東正士氏の案内と伊藤一允氏らの協力を得て、五戸道・七戸道の調査を重ね、2009年、『古道を歩く、十和田湖はむかし信仰の湖だった』(文化出版⑩)を出版しました。これは嘉永2年(1849)、七戸道経由で十和田湖を訪ねた松浦武四郎の『鹿角日誌』や、江戸時代末期の「十和田参詣案内記」(五戸道)の記述と、たびたび古道を歩き現地を熟知している東正士氏の案内による調査の成果をもとに、執筆されたもので、十和田参詣道を世の中に紹介した最初の書です。ただこの『古道を歩く』では、熊野古道や箱根古道、鎌倉七口など、近年の「歴史の道」調査・研究で注目されている「古道」遺構(遺跡としての道路)には、目が向けられておらず、近代の林道や生活道路と、江戸時代以前の古道との区別が行われていない、という弱点がありました。

2018年、私(斉藤)と十和田湖伝説の伝え方を考える会(中川一樹会長)は、山岳霊場十和田と十和田信仰に関する初めての本格的な書、『霊山十和田、忘れられたもうひとつの十和田湖』(文化出版⑪)を刊行しました。しかし、藤原道の一部(鉛山峠付近)を除いて、十和田参詣道の調査までは手が及ばず、江戸時代の文献記録と、『古道を歩く』の成果をもとに、5つの参詣道のルートを確定し、現在に残る道標や御神燈などの石造物を紹介するにとどまりました。

2019年6月、私も参加した十和田歴史文化研究会主催の「月日山道を歩く」ツアーで、古道だとされていた林道のそばに、一時代前の道が、それも堂々たる堀道状の遺構が、延々と続いていることが発見されました。これを受けて2019年11月、十和田歴史文化研究会と十和田湖伝説の伝え方を考える会の主催による第1回十和田古道学術調査が、五戸道の登り口月日山一帯で行われました。結果は素晴らしく、笹藪をかき分けた先に、あるいは現在の林道のそばに、延々と続く堀道が良好な状態で残っているのを確認し、一

同歓喜の声を上げたことを鮮明に覚えています。そしてこれがその後の調査・研究の出発点となり、2020年度は五戸道の、2021年度には七戸道の調査を、一通り終えることができたのです。



いまよみがえる 北奥の聖地
忘れられた霊山 十和田湖!
目撃者と面談のガイドブック・伝説の会メンバーの考察による
はじめての十和田湖参詣ガイドブック
文化出版 2018年7月発行 148頁 250円+税
十和田神社宮司 織田氏も絶賛が



⑫ 古道調査風景、月日山地蔵堂そば、⑬ 大規模な堀道が見つかった(⑫地点の下手)、⑭ 笹に覆われた堀道を登る



とくに五戸道の東側の部分、**15**月日山の登り口から、月日山山頂の**20**日月神社をへて、惣辺牧野の鳥居長根に至る月日長根の中間地点、**24**天保6年の御神燈までは、古道がよく残っていて(約70%が残存)、古道歩きのおすすめの区間です。



15月日山登り口、**16****17****18**月日山への道に残る見事な堀道、**19**月日山地蔵堂、**20**日月神社、神社らしくない、**21**社殿内部、御神体は地藏と観音の石仏、**22**月日山清水、浄めの場、**23****24****25**月日長根の林道脇に残る堀道を歩く、**26**古い堀道(左)と新しい堀道(右)、**27**天保6年の御神燈

3、古道調査の方法・手順と、「十和田古道歴史地図」の作成

ここで私たちの十和田古道調査の方法と手順をお話ししましょう。私たちの調査が、次の4つの手順をへて行う学問的・科学的なものであることを、皆さんに知っていただきたいからです。

① 最初は、古道についての記述がある文献資料の蒐集と、その分析から始めます。

十和田古道については、

菅江真澄『十曲湖』（文化4（1807）年、真澄が歩いた藤原道と白沢道についての記述がある）

松浦武四郎『鹿角日誌』（嘉永2（1849）年、松浦武四郎が第三次蝦夷地探検の帰りに七戸道を通じて十和田湖を訪ね、白沢道経由で毛馬内に出たときの記録）

「当時十和田参詣道中八戸よりの大がい」（十和田参詣案内記、八戸市立図書館蔵『十和田記』所収、文政12年（1829）成立、作者は八戸の人で、五戸道についての基本資料）

『新撰陸奥国誌』（明治初年の編纂、地誌、北郡滝沢村・奥瀬村、三戸郡貝守村に「十和田道」（五戸道・七戸道・三戸道）についての記述がある。とくに、鳥居長根、鳥居長根平、三戸路＝南路、赤倉峯、など地名についての情報が貴重）

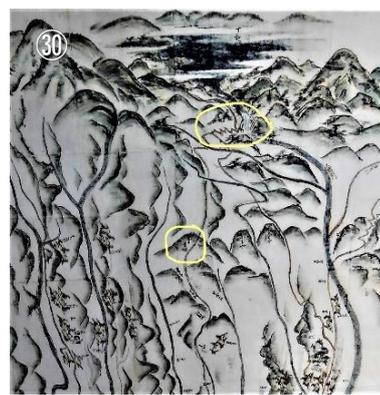
「十和田山新道普請之碑」（写真⑳、元禄6年（1693）7月1日、子ノ口の国道そばに立つ）



以上5点が基本資料です。また近代の編纂物ですが『十和田村史』（1955年）も多くの情報を載せて役に立ちます。ただ注意が必要なのは、これら文献記録の叙述が絶対ではないことです。先に紹介した休屋の解除川（はらい川、神田川）のみそぎ場について、菅江真澄『十曲湖』は「細くよこたふ流れを解除川とて、手あらひ、くちそゝき、身もきよまはりぬ」と詳しく記していますが、『鹿角日誌』や「十和田参詣案内記」は一言の言及もありません。これは作者の関心によるもので、ある文献に記述がないからといって、それが存在しなかったわけではないのです。

② 次に地図と空中写真を用意し、事前に精査します。

地図は近代の測量地図が絶対不可欠ですが、あれば明治以前の古地図も役に立ちます。十和田古道

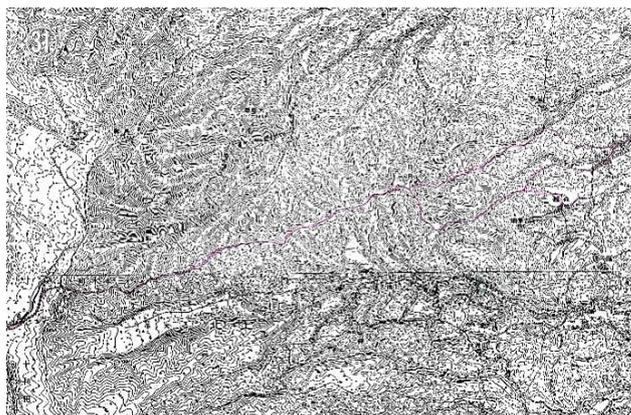


では、もりおか歴史文化館蔵「五戸通絵図」（⑳全体写真、㉑月日長根・銚子大滝付近の拡大写真、江戸時代作成、ごのへ郷土館にレプリカがある）が、五戸道・月日長根・七戸道・銚子大滝・十和田湖を描いていて有用

です。ただしこの地図には情報収集不足によると思われる誤りも多いので、注意が必要です。

近代の測量地図では、大正4年（1915）陸地測量部5万分の1地形図と、昭和32年（1957）国土地理院5万分の1形図（十和田湖・八甲田山・三本木・田子、写真㉑は五戸道のうち月日山から月日長根をへて惣辺に至る部分）を基本に、現在の2万5千分の1地形図を合わせて使いました。

大正4年と昭和32年の地形図を基本としたのは、現在の国土地理院の地形図は、精度の高い航空写真によるため





地形は正確ですが、山道などの人文情報は不足している上に（実際には道があるのに記載されていないことが多い）、現地測量を行わず、昭和32年の山道をそのまま現在の地図にトレースするという安易な方法で作成していることが、現地踏査で判明したからです。また大正4年の地図は昭和32年の地図と比べて人文情報に欠落が多く、「古いから歴史資料として良質」ではないこともわかりました。まさに作家新田次郎が小説『八甲田山死の彷徨』で徳島大尉の言葉として語っているように、「地図は絶対ではない」のです。



そして国土地理院撮影の空中写真です。この空中写真には古道の道筋が近代の林道とともに鮮明に写っていて、調査には非常に役に立ちました。私たちは、1948年（米軍撮影）、1962年、1966年、1975年（写真③③など、七戸道、馬ノ神の東麓部分）、1976年（写真③④など、五戸道、月日山への登りの部分）、2001年の空中写真を、インターネットからとって事前にくわしく調べ、現地調査にも持参しました。

そして国土地理院撮影の空中写真です。この空中写真には古道の道筋が近代の林道とともに鮮明に写っていて、調査には非常に役に立ちました。私たちは、1948年（米軍撮影）、1962年、1966年、1975年（写真③③など、七戸道、馬ノ神の東麓部分）、1976年（写真③④など、五戸道、月日山への登りの部分）、2001年の空中写真を、インターネットからとって事前にくわしく調べ、現地調査にも持参しました。

③その上で古道調査チームの編成を行います。

チーム編成でもっとも大事なものは、最少でも4～5人のメンバーをそろえること、そしてそのメンバーの中に、(1)古道調査の経験があり、昔の道と現代の道の区別ができる人と、(2)現地を歩いたことがあり、迷わないよう道案内ができる人を確保することです。(3)考古学や歴史学・民俗学の研究者が参加できれば、より理想的です。

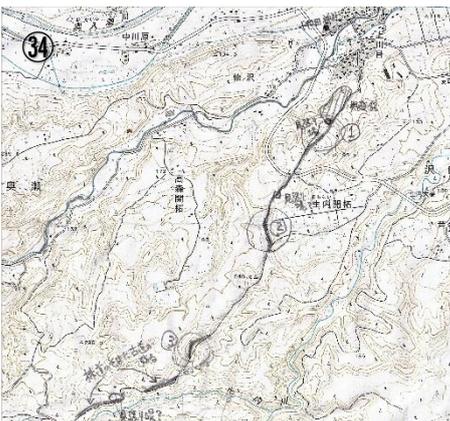
ちなみに(1)は当初は私だけでしたが（私が属する日本中世史学では、古道研究が中世城館研究とともに、一つのジャンルとして存在します）、古道調査を重ねる中で、多くのメンバーが「古道」遺構をみつける力量をつけ、複数の古道プロフェッショナルを養成することができました。

③最後に「古道調査のグッズ」を用意し、いよいよ現地調査の実施です。

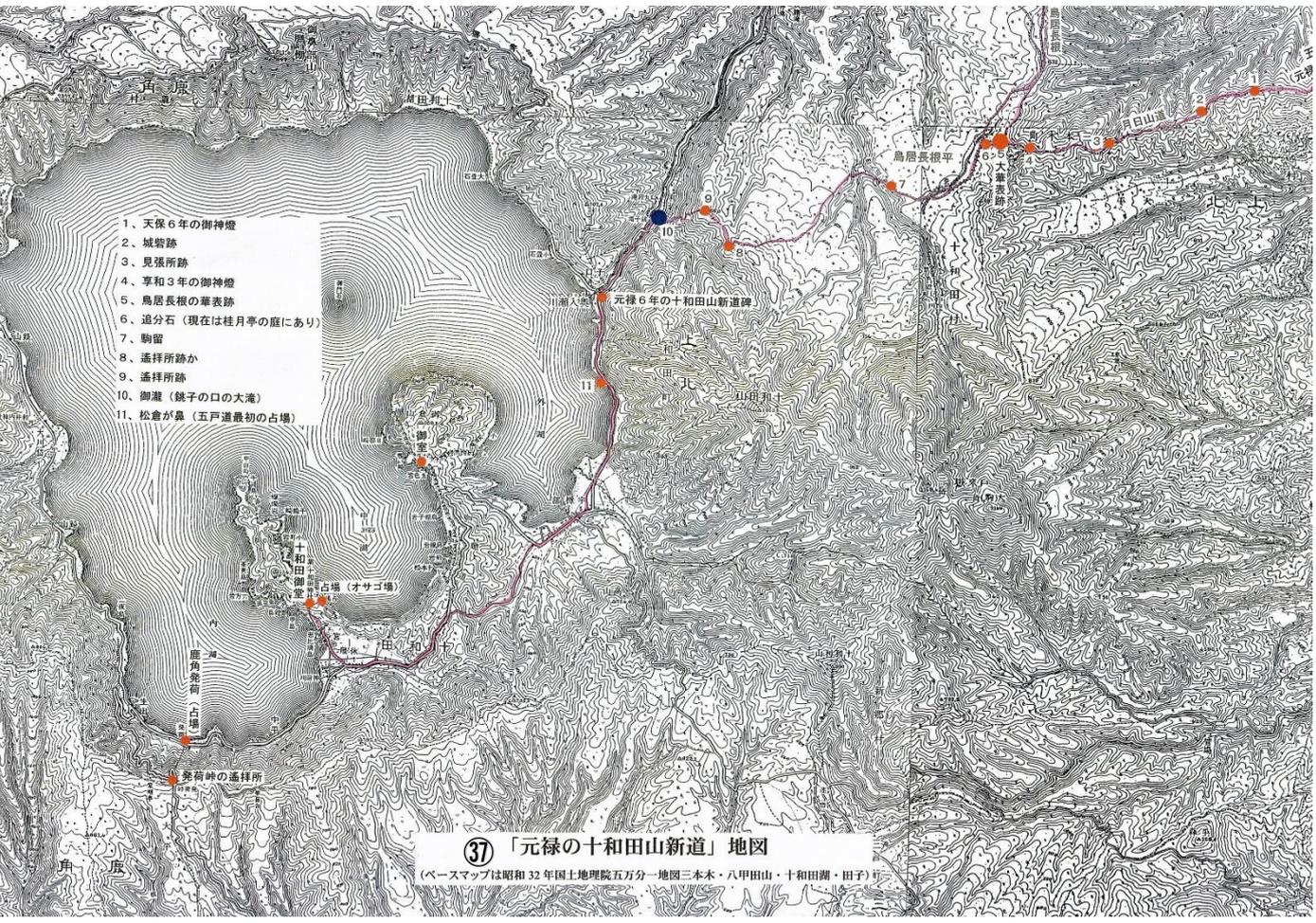
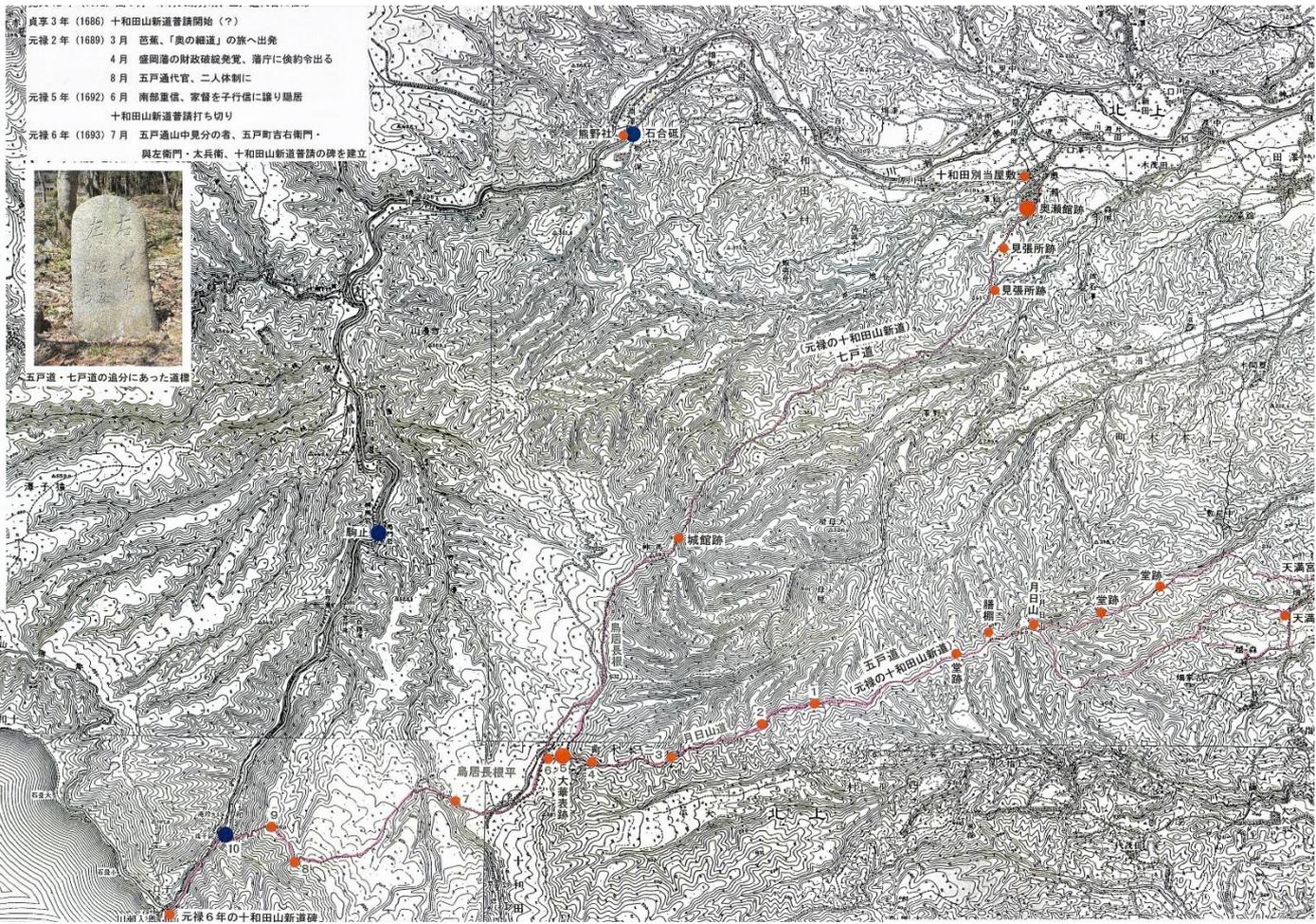
「古道調査のグッズ」は、書き込み用の地図とメモ帳、記録用のカメラ、それに自分の位置を確認し、地図に古道のルートを書き込むためのGPS発信機を持参する必要があります。あとは身支度を



調べ（長靴に長袖の衣類、帽子・手袋・雨具）、水と食料、熊よけの鈴かトランジスタラジオをもちばOKです。さあいよいよ調査実施です。参考までに七戸道の調査の過程で作成した、③④歩きながら書き込みをしたメモ地図と、③⑤GPS軌跡を地図上に落とした地図（ベースマップはともに最新の2万5千分の1地形図）を、例示しました。現地調査のあとは、これらのデータを一つにまとめた③⑥「古道調査地図」を作成して、調査終了です。



最後に調査地図を集成して「十和田古道歴史地図」を作ります。ベースマップは「歴史地図」に合うよう、高度経済成長の波が地方に及ぶ前の1957年発行5万分の1地形図を使いました。こうして2019～21年度の調査結果をもとに作成したのが、③⑦「元禄の十和田山新道」地図です。



37 「元禄の十和田山新道」地図

ベースマップは昭和32年国土地理院五万分一地図三本木・八甲田山・十和田湖・田子町

4、解明された「十和田山新道」の謎

いよいよ報告の本題に入ります。お話しするのは、2019年11月から現在に至るまでの十和田古道学術調査において、どのようなことがわかったのか、そのハイライトの部分です。

実は、私たちが「十和田古道」の学術調査に着手するにあたって、解明すべき大きな謎がありました。「元禄の十和田山新道」といわれる道路の謎です。この「元禄の十和田山新道」について記しているのは、子ノ口の国道のそばに立っている、元禄6年（1693）7月1日付、十和田市文化財保護協会が「十和田山新道開通の碑」と命名した石碑で（写真③⑧）、そこには次のような文字が記されていました（読みやすいように読み下し文にしました）。



十和田山新道、別当左馬丞の願いにより、
五戸郷藩吏木村又助秀晴、
太守重信公の厳命を窺い、これを普請す。

時に元禄六癸酉歲

七月一日 吉左衛門
山中見分の者、五戸町 與左衛門
太兵衛

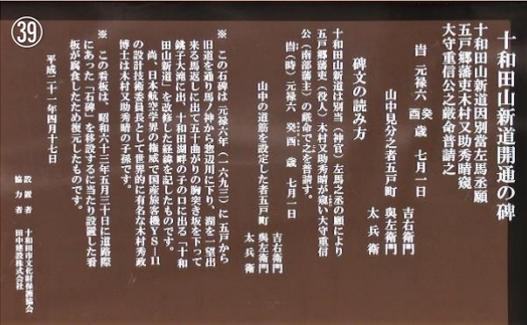
※「別当左馬丞」は、十和田御堂（十彎寺）別当折田（織田）左馬丞、「五戸郷藩吏木村又助秀晴」は五戸通代官木村又助秀晴（在任 1672～1697）「太守重信公」は盛岡藩三代藩主南部重信（1664～1692、盛岡藩主）「山中見分の者」は、「山見者」ともいわれ、代官所が管内の山の見回りや山道通行人の監視のために置いたもので、士分・足軽以外に、百姓・町人からも登用された。

十和田市文化財保護協会の解説文は（写真③⑨、平成21年、2009年設置）、この碑を「新道開通の碑」とした上で、「この石碑は元禄六年（一六九三）に五戸から旧道を通り馬ノ神から惣辺川に下り、湖を一望出来る馬返しに出て五十曲がりの胸突き坂を下って銚子大滝に出、十和田湖畔の子の口に出る「十和田山新道」を改修した経緯を記したものです」と解説しています。これだと「新道」は馬ノ神を通る道、つまり七戸道ということになります。

問題は3つありました。第1は「新道」の意味と「十和田山新道」のルートと区間（七戸道、子ノ口までというのは正しいか）。第2は新道普請の工事期間。そして第3に「開通の碑」という名称は適切か、つまりこの碑の建立理由です。

最初の「新道」の意味は、初年度、2020年度の五戸道の調査で、つかむことができました。発見した「堀道」は、道幅約1m、上幅5～7m、深さは2～5mの堂々たる整備された道で、一カ所が百メートル以上にわたって続く上に、月日山の登り口から、惣辺牧場の手前、「鳥居長根」と呼ばれた尾根まで、約11キロにわたって断続的に延々と延びていることが、確認されたからです。大量の労働力を、長期にわたって投入した工事の産物であることは明白でした。工事の主体は五戸代官所、藩主の命による公費を投入した藩営の事業、という碑文に書かれている内容と一致します。

それだけではありません。この11キロの区間のうちのいくつかの場所では、整備された大規模な堀道のそばに、堀幅2～3m、



④⑩月日山登り口、最初に出会う堀道、④⑪月日山の手前、画面左の高所に中世の道が残っていた。



深さ 0.5m 程度の小規模な堀道が存在し、それが、ある長さの区間、並行して延びていました。注意して見ると、そうした並行する小規模な堀道があるのは、古道が丘を越える場所で、そこでは小規模な堀道はそのまま直進し、急坂で丘を越えているのに対して、規模の大きな堀道は坂を避け、丘の中腹を迂回するように造られていたこともわかりました（写真④②）。

おそらく、この規模の小さい堀道は、元禄の普請工事以前からあった中世以来の道＝中世十和田古道であり、元禄の「十和田山新道」とは、この中世以来の古道を改修して、幅が広く歩きやすい



堀道に作り替え、とくに丘を越える急坂区間では、丘の中腹に勾配を緩和した別線＝「新道」を建設した、1968年に完成した東北本線盛岡青森間複線電化工事のようなものであったことが、浮かび上がってきたのです。

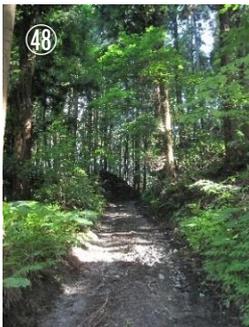
そして、この推測を裏付けるように、五戸道では月日長根の西側の区間で、古道を通る敵兵を遮断し

④② 月日長根で見つけた並行する中世の古道（左）と近世の新道堀道（右）の跡
④③ 月日長根で見つけた戦国時代の山城跡 ④④ 同じく見張所とみられる施設の跡

攻撃する陣地となるような戦国時代の山城と、見張所の跡を発見することができました（写真④③④④）。五戸道はもともと中世からあった道であり、それが江戸時代の「十和田山新道」工事で改良され、現在見る姿になった、という事実が判明したのです。

となると次は、この「十和田山新道」は五戸道だけなのか、七戸道だという文化財保護教会の解説は間違いなのか、という問題です。昨年、つまり 2021 年度の古道調査は、この疑問を一気に解決する調査となりました。七戸道でも五戸道と同様な堀道が建設されており、場所によっては五戸道をしのぐ、規模の大きい壮大な堀道が造られていたからです。写真④⑤④⑥、七戸道の起点である奥瀬の十和田別当宅跡から出発して南に 2 キロの地点で見つかった堀道が、まさにそれでした（地図④⑦の緑色でマークした場所）。この場所は、奥瀬から芦名沢をへて大不動方面に向かう広域農道から入って、熊野古道を思わせる杉林の中の林道（写真④⑧、昔の古道ルートです、④⑨は熊野古道、水呑・伏拝王子間）を歩いて約 10 分、手軽に古道歩きを体験できる絶好の場所であることも、強調しておきましょう。

そして、整備された大規模な堀道は、近代の林道化のため五戸道



ほど残りはよくないのですが、惣辺牧野の北に聳える馬ノ神の山麓まで、断続的に続いていました（写真 50・51・52）



50、七戸道の堀道、51、林道に改修された堀道、矢印の地点の奥に中世の古道が残る。52、近世当時のまま残る堀道、約500m続く。53・54・55、馬ノ神山頂近くで発見した山城跡、56、北西からみた奥瀬館跡(1)と十和田別当宅跡(2)

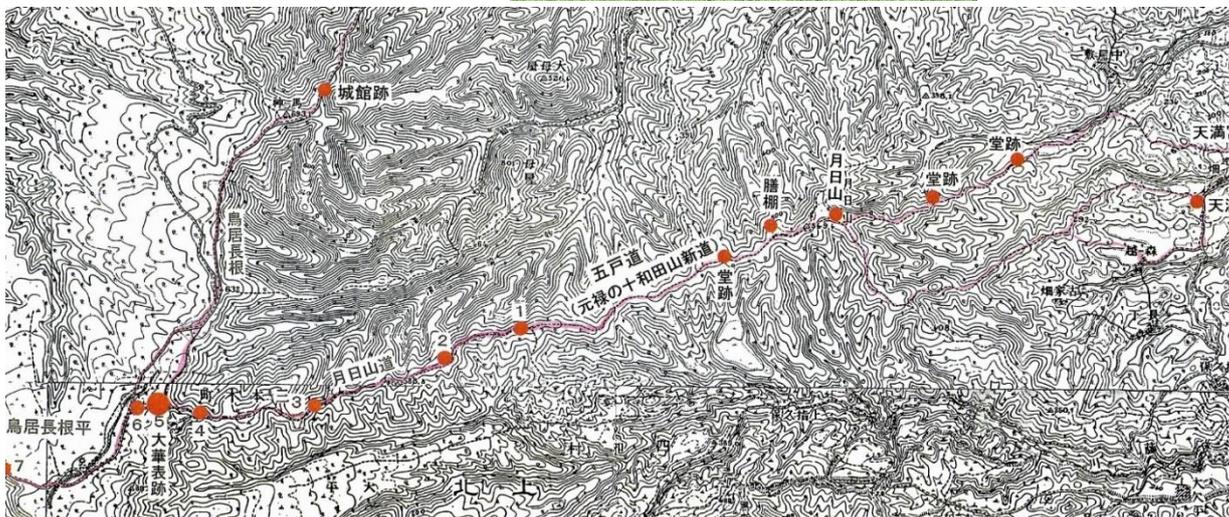


また五戸道と同様に、規模の小さい中世以来のものと思われる堀道が何ヶ所かで残っていることや、古道の通行を遮断するための戦国時代の城塞＝山城が構築されていたことも、確認できました。しかも馬ノ神山頂から北東側に少し下った急斜面で発見したこの山城跡(写真53・54・55)は、五戸道で発見した山城より格段に大規模かつ堅固である上に、城の中を古道が通過するように造られていて、街道遮断の軍事施設としてはるかに強力なものだったのです。

それは中世における七戸道の性格について、一つの仮説を可能にしてくれます。

実は中世以来の十和田参詣道の本道とされている五戸道では、そうした評価にふさわしく、参詣道沿いに、霊場月日山と、修験の行場で八甲田山の遙拝所であった膳棚を筆頭に、御神燈・石仏・道標や、堂跡とみられる人工の平場が数多く見つかっていて(地図57、写真58・59)、「十和田参詣古道」の名にふさわしい姿をとどめていました。

ところが七戸道ではそうし



58、月日山の登り口柏木の太田家にある聖観音の石仏



59、月日長根（地図の1地点）にある天保6年の御神燈と文化12年の追分石



61、堀道はA地点で突然終わっていた



62、五戸道、銚子大滝上の十和田湖遙拝所近く、63、七戸道、惣辺牧野から馬ノ神山に登る途中の風景

た信仰遺跡は発見できず、かわりに古道の登り口に構えられた奥瀬館の跡や（三戸南部氏の重臣で三戸城内にも屋敷を持っていた奥瀬氏＝旧姓小笠原安芸氏が、主君南部家から与えられた居館で、三戸領の北の守りの任も担っていた。古道はその直下にある空堀状の沢筋を登る）、途中にある複数の見張り場とみられる施設など、まさに「軍道」ともいべき雰囲気をもっていたのです（地図60）。

この七戸道は、惣辺牧野で五戸道と合流したあと、十和田御堂のある休屋で、先に述べた、十和田湖から元山峠・切明・小国をへて津軽の唐竹に至る中世の古道に連絡しており、津軽と南部を結ぶ八甲田越えの古道と並ぶ、いわば十和田越えの古道の一部を構成していました。もちろん、それは五戸道も同じなのですが、沿道に残る両者の遺構の違いは、この二つの道が、それぞれ並び立つ重要な道であり、五戸道が十和田参詣古道の本道であったのに対して、七戸道は十和田越の津軽軍道の本道ともいえる道であった、そうした推測を可能にしてくれたのです。

そして、この二つの道は、江戸時代の平和な時代になって、ともに十和田参詣の道として大いに利用された。元禄の十和田山新道の普請工事において、五戸・七戸の両道がともに「新道」普請の対象とされたことは、まことに当然のことだったといわねばなりません。もとより、五戸道・七戸道の両方とも、その全区間が新道工事を差配した五戸代官所の管轄領域内にあった道路です。

だが、驚くべき発見は、もうひとつありました。実は、この「十和田山新道」工事は、私たちの事前の予想と異なって、休屋までの全区間どころか、参詣道が十和田湖畔に出る地点、子ノ口までも完成しておらず、そのはるか前の地点で終わっていたのです。

すなわち五戸道では、月日山から月日長根の尾根をたどってきた参詣道が、尾根道が終わって、眼前に広々とした惣辺牧野を望む、かつて「鳥居長根」と呼ばれた高台の上で、堀道＝「新道」は終わりを告げ、その先は、ただの山道が延びているだけでした（写真62）。実はこの事実自体は大変重要なことで、「鳥居長根」という場所の意味と十和田山新道の評価に関わることで、最後に改めてお話ししたいと思います。

しかし、一方の七戸道はもっと劇的でした。地図61に示したように、馬ノ神山の北東斜面、標高480m地点から始まる江戸時代の見事な堀道＝元禄の新道が、約500m進んで、標高560mを越えた林の中で、何の前触れもなく、突如として終わっていたのです。その先の区間は、場所によって中世の古道と思われる規模の小さい堀道はあるものの、大部分は五戸道と同じく、案内人がいなければ迷ってしまいそうな、ただの山道が続いているだけでした（写真63）。これはもう、何か不測の事態が起こって、この地点で工事が中止され、二度と再開されなかった。そうした事情があったことは明白でした。

64



この事実は、子ノ口の石碑の名を「十和田山新道開通の碑」とすることは適切でない。「十和田山新道普請の碑」か「十和田山新道普請顕彰碑」とすべきであることを意味しています。そういえば、この碑を建立したのは新道工事の主体となった五戸代官木村秀晴でも、藩費の支出を許可した盛岡藩庁でもなく、五戸代官所に雇われた「山中見分の者」、五戸町町人三人でした。そこには何か事情があったことがうかがえます。

この事情を突き止める手がかりは、盛岡藩の家老日誌『盛岡藩雑書』（写真64）の中にありました。ただし、現在残る『雑書』の中には、「元禄の十和田山新道」に関する記事は、ちょうど「新道」工事期間に当たる時期に欠本があつて、残されていないので、以下は私の『雑書』解説による仮説です。

『雑書』解説から浮かび上がる「十和田山新道」工事開始から中断に至る経緯は次のようなものでした。

- ① 寛文12年（1672）閏6月17日、木村又助秀晴、5月16日死去した父空之介秀政の跡を継ぎ、盛岡藩庁から五戸通代官に任じられる。
- ② 貞享3年（1686）か元禄元年（1688）、十和田別当折田左馬丞の請願を受けた五戸代官木村又助秀晴の上申によって、十和田山新道普請工事が盛岡藩庁から許可される（三代藩主重信の時代）。

（十和田山新道普請のような事業は藩庁の許可が必要で、必ず『雑書』に記載があるが、十和田山新道普請許可の記録は残っていない。これは予想される工事期間の中で『雑書』が欠けている貞享3年か元禄元年に工事認



65、現存する五戸通代官所の建物

可が下りたと判断するのが妥当である。なお、翌元禄2年は、松尾芭蕉が「奥の細道」の旅に出発した年であり、元禄のバブル景気の中で日本全国が旅行ブームに沸き立っていた時期であった。十和田別当の新道普請請願もそうした状況を受けたものであろう）

- ③ ところが、工事開始から3年か1年たった元禄2年（1689）4月、盛岡藩の財政破綻が発覚し、藩庁、代官所、藩士全員に及ぶ儉約令が出されるに至る。そのあおりをうけて、これまで一人体制で（五戸通代官のみの特例措置）、中世以来の五戸郷の在地領主木村家の世襲であった「五戸通代官」の地位に変更が加えられ、二人体制となり、相役として行政のエキスパートがつけられた。この結果、普請工事費の支出には制限が加えられるようになったと思われる。
- ④ 元禄5年（1692）6月27日、盛岡藩主南部重信が隠居し、嫡子行信が第四代藩主に就任した。この結果、十和田山新道工事は中止を命じられたとみられる。
- ⑤ 元禄6年（1693）6月1日、子ノ口の「十和田山新道普請の碑」が建立される。この時点で、工事再開の見込みがなくなったことがはっきりし、事業を顕彰する意志で、「山中見分の者」に任じられていた五戸町町人三人が、碑を建立したとみられる。新藩主行信の時代に、碑文の中で前藩主重信の「厳命」を強調していることに、「十和田山新道」の全線開通を期待していた五戸通りの人々の無念の思いがうかがえよう。
- ⑥ 元禄6年（1693）10月、盛岡藩の江戸上屋敷から出火し、屋敷は全焼した。再建費用は金九千六十五両余りと莫大であり、財政破綻のさなかでもあつて、「十和田山新道」工事の再開は到底不可能な事態となった。
- ⑦ 元禄10年（1697）、正月11日、木村又助秀晴、五戸通代官を辞任、上山半右衛門に交代する。すなわち、「十和田山新道」普請工事の期間は、長くても貞享3年（1686）から元禄5年（1692）までの6年間、短くとれば元禄元年（1688）からの4年間という短期間でした。新道建設が途中で終わっていることも、この短い工事期間をみれば納得ゆくでしょう。

5、「十和田山新道」最大のハイライト、鳥居長根（惣辺牧野）大鳥居の遙拝所と大景観

最後になります。先に、五戸道の元禄の新道工事は、古道が月日長根から惣辺牧野に出たところ、「鳥居長根」の丘の上で終わっていた。そこには大変重要な意味がある、と述べました。未完の十和田山新道ですが、「鳥居長根」までは完成していた、そこにはどんな意味があるのか、という問題です。

ポイントは「鳥居長根」という地名にあります。この地名は、明治初年に編纂された青森県の地誌『新撰陸奥国誌』に記されているもので、現在惣辺牧場がある牧野も、「鳥居長根平」と呼んだと記されています。鳥居が立っている尾根、その尾根の下に広がる平地、という意味です。

この鳥居のことは、嘉永2年(1849)旧暦7月18日、七戸道をたどって十和田山参詣を果たした松浦武四郎の『鹿角日誌』に、次のように記されています。

(馬ノ神の山頂から) 少し下りて大なる草原に出る、此処にて雲霧も少し晴、南の方を見るに、遙かに華表(鳥居)一基見えたり、是は五戸より上る道なるよし、同行の者云けり、扱、暫く行て又木立原に入る、聞に、奥瀬村より上るもの、此処にて多く道迷するよし、皆此鳥居を本道と見て過てる事有と、

遙か遠くから見えたとあるから、大鳥居だったのでしょ。大なる草原とあるので、鳥居の周りにはか



なり開けていて、眺望もきいたはず。これは五戸道にあり、鳥居をみたものは間違っそちらへ行ってしまふ、とありますので、五戸道はこの大鳥居をくぐって大草原に出ていた、そうした景観が推測されます。「鳥居長根」「鳥居長根平」という地名がつけられるくらいですから、この地の性格に関わる大鳥居だったと考えて間違いはない。

残念ながら、武四郎は七戸道の本道ではなく、この鳥居の下を通る脇道(昭和32年の5万分の1地図に記されています)を通ったらしく、鳥居からの景観を記しておりません。あいにく雨の天気で眺望もきかなかつたようです。またこの鳥居があった場所(五戸道と七戸道本道が合流する地点の西にあたります)は、現在惣辺牧場の敷地になっていて立入禁止です。しかし幸いなことに、私たちは当時の十和田参詣者が見たのとほぼ同じ景観を、少し南にある十和田市営惣辺牧場広場展望台(写真66・67)から見ることができます。それは本州にもこんなところがあるのか驚かされる、すばらしい景観です(写真68)。



この鳥居長根の大鳥居とはどういう場所なのか。そもそも鳥居とは、神社の入口に立ち、俗界と神域をわける「結界」でした。この大鳥居から先は十和田のカミがすむ聖域である、その標なのです。

実は、十和田参詣道五戸道では、道をまたいで鳥居が立つ場所が2ヶ所ありました。一ヶ所は休屋の解除川（神田川）のみそぎ場から十和田御堂に至る杉並木道の入口。もう一つがこの大鳥居です。

霊山十和田がモデルにした霊場熊野の参詣道本道中辺路でも、似た場所がありました。熊野の「御山」



に入る入口滝尻王子から、重畳たる山並を越えて、本宮大社のある本宮盆地に入る入口であった発心門王子です（写真 69）。そこにはカミの聖域の入口を示す大鳥居が立っていて、人々はカミに祈り、みそぎをしたといいます。発心門王子の先、伏拝王子まで行くと、はるかに熊野川の中州大斎原にある本宮大社の森が眺められました（写真 70）。五戸道における鳥居長根の大鳥居と銚子大滝の上の外輪山にある十和田湖遙拝所（写真 71）の関係とまったく同じです。



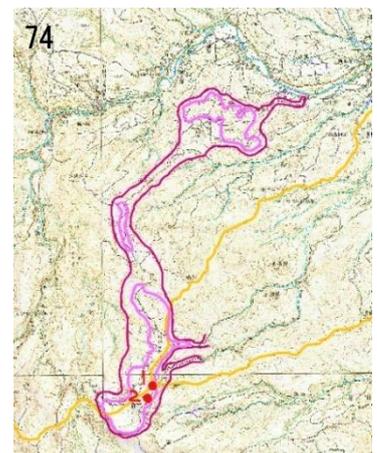
発心門王子は、熊野に参詣する者が、みそぎをし、熊野のカミに祈る場所でした。鳥居長根の大鳥居も同じだったでしょう。しかも十和田ではそこにもうひとつの要素が加わります。十和田カルデラ、八甲田山、奥入瀬の原生林を一望する大景観です。最初に述べたように、霊山十和田の信仰の中心、十和田御堂（現在の十和田神社）の正式の名は「額田嶽熊野山十彎寺」（十瀧寺とも）でした。八甲田山、十和田湖、そして奥入瀬溪谷。鳥居長根の大鳥居は、「霊場十和田」を構成する聖域のすべてを遙拝できる遙拝所だったのです。それは五戸道だけではありません、鳥居長根で五戸道に合流する七戸道の参詣者も、今回の古道調査で発見した「十和田参詣の第六の道」奥入瀬溪谷の道（淵沢の石合砥が入口、写真 72）から十和田に入った（石ヶ戸から惣辺牧野に出て七戸道に合流）人々も、すべてこの大鳥居をくぐり、大景観を目にし、聖域に足を踏み入れたのです。



この景観がいま危機にあります。2025年着工、2029年稼働予定の、総数43基、風車の高さ180m、出力18万KWの惣辺奥瀬風力発電所計画です。発表から2年、住民・関係者の要望にもかかわらず、計画内容をめぐるオープンな議論は行われておりません。いま求められているのは何か、時間は迫っていることを述べて私の報告を終わります。



計画内容をめぐるオープンな議論は行われておりません。いま求められているのは何か、時間は迫っていることを述べて私の報告を終わります。



73、風力発電所完成時のイメージ図、74、風力発電所の位置